F·wave

2026 10

藤沢市市民活動支援施設情報誌「エフ・ウェーブ」

特集：子どもたちの未来を照らす「森のようちえん」



子どもたちの心からの笑顔をつくること、自信をもてる居場所をつくること、そして大人自身が変わることで子どもへの「生きづらさ」の連鎖を断ち切りたい――。そんな強い思いから立ち上がった「森のようちえん ひっこりー」。活動の転換期を迎え、新たな試みや出会いを経て深まる思いと今後の展望について、代表の横山さんにお話をうかがいました。

「ひっこりーの森のようちえん」とは－

「私は、自分自身が幼少期から 18 歳まで、生きづらさを抱えていることに気づかないまま過ごしてきました。18 歳のときに初めてそのことに気づき、そこから自分自身について学び、独学で少しずつ変わってきました。だからこそ、子どもの頃の環境や、大人との関わり方は、その後の人生に大きく影響するのだと感じています。」と話す横山さん。「子どもの心からの笑顔をつくること」を自分の夢にして、13 年間保育士として働いてきたそうです。その中で、子どもを変えようとするのではなく、まず大人が変わること、そして保護者も一緒に学び、子どもにとって一番良い関わり方を考えられる場所をつくりたいという思いが強くなったと言います。「そんなときに『森のようちえん』と出会いました。自然の中で子ども自身が考え、選び、失敗も経験しながら育っていくことや、『心の根っこを育てる』という価値観が自分がやりたいことと重なり、団体を立ち上げること

（次ページに続く）



講座・イベントのごあんない

イベント	日時
■食育講演会「キミたちに食べさせたい！」	11月6日（金）10:00～12:00
■FUJISAWA ボラ活フェスタ	11月7日（土）10:00～14:30
■市民活動プラザむつあい　休館日	10月12日（月・祝）開館、10月13日（火）休館
■ミライカナエル活動サポート事業　中間報告会	11月14日（土）13:00～
■IT サポート講座「らくらく Google 講座」	11月30日（月）13:30～16:00

NEW! 支援施設からのお知らせ

■食育講演会「キミたちに食べさせたい！」

六会市民センターと市民活動プラザむつあいの共催講座です。
日時：11 月 6 日（金）10:00 ～ 12:00
会場：六会市民センター　3 階　ホール
料金：無料
定員：50 名　先着順　（ 10 月 21 日（水）申込み開始 ）
講師：藤本 美佳　氏　（N）湘南栄養指導センター

■FUJISAWA ボラ活フェスタ

あなたの「やってみたい」がここからはじまる
日時：11 月 7 日（土）10:00 ～ 14:30
会場：藤沢市役所 分庁舎　1・2 階
内容：ボランティア団体活動紹介ブース＆展示 / 総合相談コーナーなど
主催：藤沢市社会福祉協議会　地域福祉活動センター（ふじさわボランティアセンター）
共催：藤沢市・市民活動推進センター・市民活動プラザむつあい
協力：チーム FUJISAWA2020・（公財）藤沢市みらい創造財団

■市民活動プラザむつあい　休館日変更

「市民活動プラザむつあい」は、スポーツの日のため 10 月 12 日 (月・祝) を開館日といたします。翌日 13 日 (火) が休館日となります。ご注意ください。

■地域のミライを育む活動の今を知る　ミライカナエル活動サポート事業　中間報告会

ミライカナエル活動サポート事業は、市民活動団体が地域をよりよくするために取り組む活動を支援する事業です。このたび、令和 8 年度に助成を受け、事業を実施している団体が中間報告を行います。報告後は、藤沢市市民活動推進委員会委員との意見交換も予定しています。地域づくりや市民活動に関心のある方は、ぜひご覧ください。
日時：11 月 14 日（土）午後 1 時から
会場：藤沢市役所　本庁舎 5 階　5-1 会議室
傍聴者定員：10 名（先着順。要事前申込）
問合：藤沢市役所　市民自治推進課
TEL　0466-50-3516　/　FAX　0466-50-8407
E-mail　fj1-jiti-s2@city.fujisawa.lg.jp

■IT サポート講座「らくらく Google 講座」

Google サービスの使い方「ドライブ」「スプレッドシート」「ドキュメント」「音声入力」など無料で使える便利なサービスを幅広く学ぶことができる入門講座です。
日時：11 月 30 日（月）13:30 ～ 16:00
会場：市民活動推進センター会議室 A
内容：「音声入力」などのサービスについて
料金：1,000 円
対象：NPO・市民活動・地域活動に関わっている方
定員：10 名（先着順・貸出 PC5 台まで）
講師・運営：藤沢市市民活動支援施設サポートクラブ IT サポーター

発行：藤沢市市民活動支援施設
本館：市民活動推進センター
開館時間 9:00 ～ 22:00　火曜休館
※日・祝は9:00 ～ 20:00
〒251-0052
神奈川県藤沢市藤沢 1031 アーバンセンター藤沢 2F
TEL：0466-54-4510 FAX：0466-54-4516
E メール： f-npoc@shonanfujisawa.com

分館： 市民活動プラザむつあい
開館時間 9:00 ～ 17:00　月曜休館
〒252-0813
神奈川県藤沢市亀井野 4-8-1 六会市民センター 2 階
TEL＆FAX：0466-81-0222
E メール： f-npoplaza@shonanfujisawa.com

編集：認定 NPO 法人 藤沢市民活動推進機構（藤沢市市民活動支援施設　指定管理団体）

※この情報誌は、サポートクラブのメンバーのご協力により、皆さまのお手元に届いております♪
サポーターも随時募集中です！

子どもたちの未来を照らす「森のようちえん」

を決心しました。」とのこと。「『一人で頑張る自立』ではなく、『人とつながり、協力しながら生きていく自律』を、大人が背中で伝えられる場所にしたい。」という理念を大切に活動しているそうです。

ミライカナエルへの挑戦とインターン受入がもたらした変化

立ち上げから１年ほどボランティアベースで運営を続ける中で、活動の継続性や学びの機会、基盤づくりを求めて助成金事業「ミライカナエル」に応募したそうです。また、子どもたちにとっての「憧れの存在」となってもらうため、若い世代のインターン（ワカモノ）の受け入れにも挑戦したとのこと。この一連の取り組みは、団体のあり方や代表自身のマインドに大きな変化をもたらすきっかけとなったと横山さんは言います。

「応募からプレゼンの時期にかけて、物件購入や自身の入院・術後といった大きな出来事が一度に重なりました。その中で、保護者の方々が私を支えてくださり、私の子どもを無償で預かってくれたり、活動を助けてくれたりしました。その経験を通して、私自身が “誰かを支える側” だけではなく、“自分も人に支えてもらっていい”。」と実感したそうです。

「これまで私は、運営をほとんど一人で抱えてきました。でも、ミライカナエルでの学びやインターンとの関わりを通して、“メンバーに甘えることも大切なんだ” と気づきました。全部自分でやろうとするのではなく、仕事を分けること、誰かに頼ること。」これからの運営方法を見直す機会となった２つの挑戦、動いてみたからこそ、わかることもあると教えてくれました。「実際に来てくれた高校生も本当に素敵な心を持っていて、子どもたちと自然に馴染んでくれました。『大人が子どもを教える』関係だけでなく、様々な世代が影響を与え合う環境ができたことも大きな成果です。また、これから親になる若い世代に子育てや大人のあり方を考えてもらう機会にもなりました。私たちにとってこれらの出会いは、Win-Win という言葉だけでは表せないほど、大きな意味がありました。」と話し、大切にしていた団体の理念を改めて実感することができたそうです。


はじめての料理体験

これからの課題、今後目指したい目標や成果


手作りの花冠

「私たちが大切にしているテーマは、『大人が変わり、生きづらさを子どもに連鎖させない』ということです。今は、そのための形として「森のようちえん」が一番良いと感じています。ただ、活動の中で出会った子どもたちや保護者の方々を、森のようちえんに通っている期間だけではなく、長く見守り続けられる場所も必要だと感じるようになりました。そのため、将来的にはソーシャルキャピタル型のサードプレイスをつくりたいと思っています。そして、私自身にはもう一つ、子どもの頃から持っている夢があります。それは、幼稚園教諭を経て、いつか里親になることです。一人でもいい。心の底から『生まれてきてよかった』と思えるような、子どもの笑顔をつくりたい。その思いを一つずつ形にしながら、今も夢を叶え続けています。自分でも、夢を叶えるスピードが早くて驚いています。でも、このまま死ぬまで、夢を一つ叶えたら、また新しい夢を見つけて挑戦していきたいと思っています。」自身の経験から生まれた強い信念を持ちながらも、試練や出会いを経て「人に頼り、支え合う姿」を自ら体現するようになった団体の変化が非常に印象的でした。「一人で頑張る自立」ではなく「人と繋がり協力する自律」を大人が見せていくという視点は、これからの地域子育てや居場所づくりの本質だと感じます。

（取材と記事作成：笹井・佐久間）

団体紹介

ひっこりーの森のようちえん

【設立】 2025年1月
【MAIL】:chibiayu0124v.v@gmail.com
【URL】https://www.instagram.com/aozora-time/l

（登録番号:21246）

「大人が変わり、生きづらさを子どもに連鎖させない」をテーマに、自然の中で子ども自身の考える力や「心の根っこ」を育む活動を行っています。居場所型・習い事型の森のようちえん運営のほか、将来的には多世代が支え合いともに子育てを学べるサードプレイスの創出を目指しています。
子どもも大人も自分らしく過ごせる温かな居場所を目指して活動を続けています。
活動の目的は、大人になってからも自分らしく人生を楽しめる力を育てることにより、コミュニティ形成を促し、まちづくりの推進に寄与することです。



NPO TIPS

連絡ツールに役割を。スムーズなやりとりのコツ

イベントの準備や日々の運営など、市民活動を進めるうえで欠かせないのが「活動に関わる様々な方々への連絡」です。支援施設では、「連絡の行き違いが増えて困っている…」「メンバー間でツールの使い方にギャップがある」といった悩みを聞くこともあります。連絡ツールは便利ですが、それぞれ向いている場面が違います。特徴を知って使い分けることで、連絡の行き違いなども少し減らせるかもしれません。今回は、代表的な３つの連絡ツールについて、役割を考えるきっかけにしてもらえたらと思い、私どもの取り組み事例もあわせてご紹介します。

1.SNS・チャットツール（日常のちょっとした相談・迅速な共有など）

手軽でスピーディーな反面、相談の中では「すぐに既読がつかない・返信がないと不安」「言葉遣いのニュアンスや、頻繁な通知・長文に疲れてしまう」といった声をよく耳にします。「返信は急がなくて OK」「夜間の投稿は控える」など、団体内でちょっとしたルールを事前に共有しておくことが、気持ちよく使うためには大切です。

2. E メール（対外的な連絡・見落とせない重要なお知らせなど）

団体内で「丁寧なお礼状のように挨拶を重んじる方」と「デジタル化による短文・効率化を重視する方」の感覚が混在し、戸惑う場面もあるようです。後から確認できるよう記録を残しておきたい重要な連絡などには、メールが向いています。件名に「【要返信】」と付けたり、要点を箇条書きにしたりするなど、受け取る側が読みやすい工夫もしてみましょう。

3. 電話・オンライン会議（複雑なケース・思いを伝える・緊急時など）

「相手の時間を拘束してしまうのでは…と気を遣い、なかなかかけづらい」とお悩みの方も増えています。事前に「少し電話でお話するお時間ありますか？」等とチャットツールやメールで確認してみるのも一つの方法です。複雑な相談や、文章だけではどうも行き違っているなと感じたときこそ、思い切って声で伝えることで解決する場面もあるはずです。

複数の連絡ツールを組み合わせてみる

ここまで３つの連絡手段について見てきましたが、「どれか一つに決める」というより、場面や相手に応じて使い分けることが大切です。連絡を効率よく進めることももちろん大切ですが、「相手にどう伝わるか」を考えてツールを選ぶことも、団体で活動するうえでは大事なことなのかもしれません。「うちの団体に合った具体的なルール作りって？」「ツールの使い方をメンバーと一緒に整理したい」など、お困りの際はぜひ支援施設へお声かけください。今回ご紹介した方法は、あくまで一例です。団体の状況やメンバーによって、使いやすい方法はそれぞれ違ってくるはず。皆さんの団体に合った、無理のないコミュニケーションの形を一緒に考えていきましょう。（さ）

MIRAI×F が拓く、新時代の官民協働！

なぜなにNPO vol.196



少子高齢化や地域の担い手不足など、現代の地方自治体が抱える課題は複雑化の一途を辿っている。これまでは「行政の仕事」とされがちだった地域課題の解決だが、もはや行政だけの力で支えきることは難しい。そんな中、行政・市民・企業が手を取り合い、新しい未来の選択肢を切り拓こうとする先進的な試みが藤沢市から始まっている。

2026年8月21日、藤沢市市民自治推進課の主催により「未来へと向けての基金に対する感謝状贈呈式」が執り行われた。本年度からスタートした「ミライカナエル活動サポート事業寄附支援～MIRAI×F（ミライエフ）～」において、地域の未来に投資する「インパクトパートナー」としていち早く手を挙げた企業へ、鈴木市長から感謝の意が表されたのである。この「MIRAI×F（ミライエフ）」というネーミングの根底にあるのは、互いの「リソースの共有」だ。単なる一過性の寄付にとどまらず、地域に根差す企業がその知見や資金を拠出し、行政や市民団体と共通の課題意識を持って共に歩む仕組みである。今回の式典では、その先駆者となった、藤沢ビールハウスを手がける（株）バイオクロマトと介護福祉用具を扱う（株）メディケアーの2社に感謝状が贈られた。式典で印象的だったのは、参加した企業代表者たちの言葉だ。（株）バイオクロマトの木下社長は、「当初は制度の趣旨が判然としない部分もあったが、内容を理解して賛同した。これまで国からの資金支援を受けて培ってきた知見を、今度は市民へ還元したい」と語り、活動資金支援を通じた市民生活への貢献に意欲を見せた。また、介護福祉を通じて地域を支える（株）メディケアーの丸茂専務は、「寄付が地域の未来につながることを期待し、地域企業として市の発展に貢献し続けたい」と、その熱い想いを明かした。

市民活動の現場は、熱意があっても財政的基盤が脆弱であるケースが少なくない。そこへ地域企業がパートナーとして参加することは、活動の持続可能性を飛躍的に高める呼び水となる。さらに、担当課からの説明に対して企業側が即座に参加を決めたというエピソードや、経営者同士の個人的なつながりが地域貢献の輪を広げるフックになったという舞台裏からは、地域を良くしたいという民間ならではのスピード感と熱量が伝わってくる。

地域の課題を「他人事」ではなく「ジブンゴト」として捉え、市民活動団体、行政、企業がそれぞれの強みを持ち寄って掛け合わせる「MIRAI×F」が目指すこの一歩は、これからの官民協働の理想的なモデルケースと言えるだろう。

式典の最後に、笑顔で記念撮影に収まった光景は、まさにこれからの地域社会が目指すべき「共創」の姿そのものであった。（株）バイオクロマトと（株）メディケアーとの企業2社の志が呼び水となり、市民の「ミライ」をカナエル活動がさらに活発化していくことを期待してやまない。（て）